

「第6回オープン！子ども・家庭大臣室」 ～「NPO法人びーのびーの」運営施設の視察～

■開催状況

- ・日時 平成19年12月19日(水) 10:10～11:10
- ・場所 横浜市港北区地域子育て支援拠点どろっぷ(横浜市港北区大倉山)
- ・出席者

【NPO法人びーのびーの】

奥山 千鶴子(理事長)

原 美紀(事務局長・施設長) ほか

【横浜市及び港北区】

荒木田 百合 横浜市子ども青少年局地域子育て支援課長

丸山 由利子 横浜市港北福祉保健センターサービス課

子ども家庭・障害者支援担当課長

【内閣府】 上川 陽子 内閣府特命担当大臣(少子化対策)

齋藤 敦 大臣官房審議官

吉住 啓作 政策統括官(共生社会政策担当)付

少子・高齢化対策第1担当企画官 ほか

■視察行程

- 10:10 視察
- 10:20 施設の活動案内(ビデオ放映)
- 11:30 奥山理事長から法人についての説明
- 11:35 スタッフ、ボランティア、利用者との懇談
- 11:10 視察行程終了

■視察・懇談等の概要

(1) 視察

- ・「横浜市港北区地域子育て支援拠点どろっぷ」は2006年3月開設。現行の国の制度である地域子育て支援拠点事業「センター型」に該当する事業で、「NPO(特定非営利活動)法人びーのびーの」が横浜市(港北区)から受託して行っている(又は、横浜市が「びーのびーの」に委託している)事業です。「横浜市次世代育成支援行動計画かがやけ横浜子どもプラン」における1区に1つの支援拠点モデル事業として開設され、5つの機能(親子の居場所事業／相談事業／子育て情報の収集発信事業(子育てメールマガジンの運営含む)／ネットワーク事業／人材育成事業／)を総合的に取り組むための拠点として運営されています。



施設を視察する大臣

親子の居場所事業としては、対象年齢0～6歳までの子を対象に登録しています。また、地域の子育て支援のネットワーク会議を設置しており、その参加者は、区内の幼稚園、保育所関係者、主任児童委員、子育て支援に取り組む地域の方々、社会福祉協議会、区役所となっています。

- 玄関から入って1階は、幼児の玩具、ピアノを備えた交流スペースや和室の赤ちゃんスペース、授乳コーナー、外遊びスペースなど、利便性に配慮してほとんど利用者のためのスペースを確保しています。2階には、事務室、研修室、相談室などを設けています。
- 当日は、原施設長(法人事務局長)に施設内を案内いただき、詳しく説明をいただきました。上川大臣は熱心に聞き、「どろっぷ」の施設名の由来などについて質問しました。



施設を視察する大臣

(2) 奥山理事長から「NPO法人びーのびーの」についての概要説明

- 2000年より地元のお母さん達による自主事業として始めました。どこからの補助もなく、親子の広場として、「菊名ひろば」を発足し、2002年から横浜市を通じて委託事業の対象となっています。
- その後、2006年に「預かり保育事業ゆーのびーの」、また本日の「地域子育て支援拠点どろっぷ」を開設しました。
- 土曜日には、お父さん達の「どろっぷ」への参加も多いです。ボランティアは、高校や大学生、シニアなど幅広く、横浜市以外からの参加も多く見られます。また、高校生では、ボランティア参加が単位取得につながるケースもあります。子どもと遊んだり、ピアノ演奏などもしてくれます。



法人・施設の説明を受ける大臣

(3) スタッフ、ボランティア、利用者との懇談

○上川大臣からの挨拶

- 今日、玄関を入ったときから、皆さんの元気な笑顔と声があふれ、素晴らしい雰囲気だと感じました。
- 全国にもこうした施設が増えてますが、皆さんの取組は、その先がけとなるものであると認識しています。
- ビデオ放映でも紹介がありましたが、こうした地域子育て支援拠点の活動は、当事者同士が作っていくものであり、その作っていくプロセスも非常に大切であると思います。
- 現在は、兄弟の数も減っており、子どもの成長にとつ



挨拶する大臣

でもこのような場でのふれあいは大変重要です。親にとっても、家庭で自分の子と向き合うだけでなく、他のお母さん達や、異なる世代で交流することは、孤立化を防ぎ親自身の成長にも役立つものと思います。ボランティアの皆さんも多く関わられており、あたたかい家族のような雰囲気、そして、何よりも子どもたちが元気であることを大変うれしく思います。

○スタッフ、ボランティア、利用者との懇談

(「菊名ひろば」スタッフ:伊藤さん(女性))

- ・「菊名ひろば」では今、明後日のクリスマスのお出し物などの準備で、とても盛り上がっています。
- ・「菊名ひろば」は20坪程と狭いですが、毎日20組程度の親子が来ます。出会いの場となっています。
- ・最初は第1子の利用者が多く見られましたが、7年経った今では、第2子の子育ての大変な時期に利用している方もおり、親子の成長も垣間見ることができます。
- ・施設から徒歩2分の方でさえ、「もっと早く、「菊名ひろば」の存在を知りたかった」という声を聞くこともあります。
- ・私が第1子の子育てをした時は、このような「ひろば」はありませんでした。「ひろば」に来ることで、いろいろな繋がりができます。



(原施設長)

- ・「菊名ひろば」開設の当初は、ビニールプール一つ出すにも、商店街の理解を得るのが大変でした。

(「菊名ひろば」親子ボランティア:江口さん(女性))

- ・現在3歳と1歳の子育て真最中です。
- ・第1子が生まれた時は、行く場所がなく、家にこもり気味であったが、第2子の時にこちらに来て、いろいろな方と知り合うことができました。ひろばに来ている時も楽しいですが、外で偶然会い、「どこかで会いましたね。」と声をかけられるのがうれしいです。知り合いが増えていると実感しています。
- ・1歳くらいの子であると、「はいはい」しかできず、公園にも行けません。結局、家にこもりがちになりますが、このような場所では、目が行き届き安心感があり、利用しやすいです。



(「どろっぷ」利用者<育児休業中>:矢ヶ崎さん(男性))

- ・9月より育児休業中です。
- ・「どろっぷ」で、お父さんを対象にした子育て講座を受けたのがきっかけで利用するようになりました。
- ・育児休業を取る事が非常に大変であり、代わりのアルバイトを自分で探して、仕事の工面を行って、やっと取ることができました。



- ・ 子どもが1歳から育児休業を取りましたが、給与は無給となってしまいました。
- ・ 仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章が取りまとめられ、男性の育児休業取得率の5年後の目標が5%となっていますが、育児休業を取り、家に居ても行くところがありません。他のお母さん方も同じですが、家で子どもと向き合うだけになります。こういう地域に開かれた場所が大切であると思います。
- ・ 経済的問題と地域に開かれた場所がないと、男性はなかなか入っていきません。
- ・ 育児休業を「みんな取ったらいいのに」と思います。北欧に何週間か必ず育児休業をとらなければならない制度があったかと思いますが、一度経済活動から抜け、子どもと向き合う期間を作るべきであると思います。

(原施設長)

- ・ 土曜日は、他のお父さんの利用者も多いです。
- ・ 利用者の中で育児休業と取っている方は、10人に1人程度です。

(「どろっふ」江夏さん(女性))

- ・ 勤務先は育児休業が3年取れるため、取ることに違和感はありませんでした。
- ・ 子どもが今1歳4ヶ月ですが、本当は1歳の時に仕事に復帰したかったのですが、保育園に入れなかったため、4月まで伸ばしている状態です。
- ・ 友人の中には、育児休業を取りたいが、勤務先に制度がないので、仕事を辞めた人もいます。
- ・ 大企業であれば、育児休業を取りやすいと思いますが、中小企業であっても取りやすい制度があれば良いと思います。
- ・ 男性用トイレ等におむつ替えコーナーがなく、お父さんがおむつ替えをできないところが多いです。お父さんが出かけてもおむつ替えができる場所がないと、自然と足が遠のいてしまいます。誰でもおむつ替えができ、誰でもミルクをあげられる普通の生活ができる、誰でも子どもを持ちながらお茶ができ、ご飯が食べられる、そういう社会ができればいいなと思います。

(「どろっふ」地域ボランティア:妹尾さん(男性))

- ・ 4年前に定年退職し、少子化の関係でボランティアをできないかと思い、こちらで1年前より活動しています。子どもを見守ったり、遊んだりしています。
- ・ このひろばが、多くの方から受け入れられ、喜ばれ、ほっとする居場所になっていると1年を通じて実感しています。



(原施設長)

- ・ 「どろっふ」の利用者には、双子、三つ子の方もおり、親にとっては地域ボランティアの方の存在は非常に助かります。

(「ゆーのびーの」運営スタッフ:真壁さん(女性))

- ・ 「ゆーのびーの」は人気で、キャンセル待ちの状態です。
- ・ 一日中子どもとしか話していないお母さんが多く、私たちが少しアドバイスをするだけで表情が変わります。
- ・ 急用の時や、たまには美容室へ行きたいという時などのために、一時預かりをやっており、

毎日問い合わせがあります。子育て中の方にとっては、とても必要な施設であると実感しています。

(奥山理事長)

- ・ 働いていないお母さんのためのグループ保育、利用制限のない保育が非常に求められていると実感しています。ぜひ制度的なものを広げていただきたいと思います。

(上川大臣)

- ・ この拠点は、地域の中にあり、敷居が高くなく、実家に戻ったような感じがします。そういったところが自然に出ており、すばらしい活動をしていると感じています。
- ・ 商店街等ともかかわり、地域で子育てという意識もあります。広がりがとても増えています。施設の中に入ったら鍵を閉めてというのではなく、いつでもドアが自由に開いているというのが、実はとても大切であると思います。安全ということを地域で考えることが大切です。
- ・ 子どものために地域でスクラムを組んで取り組んでいただきたいと思います。



(原施設長)

- ・ 鍵を閉めて、施設の中でではなく、子どもたちがたくさんの人の目にふれていくことが大切であると思っています。
- ・ 「びーのびーの」へは、学生ボランティアに大勢来ていただいています。ひと夏に 100 人程度の学生に登録していただいています。「どろっぷ」にも、大学生や女子学生、保育を学ぶ学生だけではなく、近隣の公立中学、高校の学生も学校帰りに寄っていただき、ボランティア活動をしていただいています。横浜市、港北区とのモデル事業として、2人1組で子育て家庭を訪問するというも行っています。

(学生ボランティア:岩崎さん(女性))

- ・ 大学4年で保育を学んでいます。
- ・ 保育を学んでいない学生は、小さい子と接する機会がありません。こういうひろばはとても大切であると思います。
- ・ 学生もいろいろな方がおり、横のつながり、縦のつながりができて、とてもおもしろいです。
- ・ このようなひろばでは、多くのお子さんだけではなく、親の方とも会うことができました。

(原施設長)

- ・ 男子学生で、初めて赤ちゃんを抱っこする人もいました。

(横浜市港北区役所 丸山課長)

- ・ こちらの拠点は、立ち上げ前から、運営を協働で行っています。
- ・ 港北区では、毎年 3,000 人程度子どもが生まれています。
- ・ 育児に不安を抱える方がたくさんいますので、こういう拠点があることは良いと思います。

- 地域といかに結び付くかが大切であり、「どろっぷ」の新規事業として、メールマガジンで地域情報の発信や、ネットワークを作り、子育て中の方、地域のボランティアの方が集まって、何ができるかを一緒に考えています。
- 学生のボランティアを、家庭だけではなく、地域にも派遣しようと考えています。

(横浜市 荒木田課長)

- 横浜では、子どもと青少年のことに集中的に取り組むということで、「こども青少年局」という新たな局を作って取り組んでいます。
- 私は子育て支援課長ではなく、「地域」子育て支援課長と「地域」がついています。子育て行政＝保育行政ととられがちですが、「地域で子育てをしている全ての方を対象に」ということを強く打ち出しています。
- 次世代育成支援行動計画を作る際に行った調査においても、子育てを行っている方の5人に1人が、「もしかしたら自分は子どもを虐待しているのかもしれない」と不安を抱えながら子育てを行っている状況でした。
- まだまだ、地域全体で子育てを支援することの必要性に対する理解が得られる状態ではありません。

(大臣)

- 地域で子どもを育てていくことは、12月18日に取りまとめた「子どもと家族を応援する日本」重点戦略の一つの柱になっています。また、11月の第3日曜日は「家族の日」、子どもを大きな家族として地域全体が見守り、子育て世帯を支えていくという理念で取り組み、前後2週間を「家族の週間」としました。
- 「どろっぷ」に集まるお子さんは0～3歳のステージのお子さんですが、これから保育園や幼稚園、小学校、中学校、高校と成長していくにつれて、それぞれに育ちの課題があります。一番大切なのは、0～3歳の時期であり、この時期にしっかりと親の愛情を子どもが受け止めると、その後の成長がスムーズに進みますが、途中で止まり始めると成長の壁を乗り越えていくことに苦労します。ここを巣立ち、他に行っても、いつも赤ちゃんのときの原点をお母さん方には思い越して頂きたいと思います。
- 食育についてですが、豊かな食生活は、育ちが膨らんでいきます。最近、食生活が荒れてきていますので、是非親御さん方には、そういう意味でのご努力、心配りをお願いしたいと思います。



(4)おわりに

上川大臣より「母さんの歌」が披露され、その後、スタッフ、ボランティア、利用者で記念撮影が行われました。



上川大臣を囲んでスタッフ、ボランティア、利用者等で記念撮影

■大臣からのメッセージ ～「NPO法人びーのびーの」運営施設の視察を終えて～

大臣就任当初から、できるだけ現場に足を運び、生の声を聞きたいという強い思いで発足させた「オープン！子ども家庭大臣室」も今回で6回目となります。

今回は、横浜市の「NPO法人びーのびーの」が運営する地域子育て支援拠点「どろっぷ」を訪ねました。同法人は、地域で子育てを支え合う取組を自主的に立ち上げ、現在は公的な事業に拡大して、地域の子育てを支え合う大きな役割を担っています。また、現場は元気な声と笑顔があふれる素晴らしい雰囲気であったことがとても印象的でした。

私は、子育ての支えを、それぞれの家庭による「自助」、政府や自治体による「公助」、そして、その中間に位置する公共的な事業体や地域社会による「共助」と分けるとすれば、フランスなどにみられるように、日本でも、もっと「共助」の取組が盛んになって欲しいと思っています。その意味で、このように当事者どうしが支え合うことから始まり、地域子育て支援拠点をつくりあげていく取組は、とても素晴らしいことだと思います。「公助」の充実に加えて、共助の分野の広がり、厚みがあってはじめて、子育てを社会全体で支える国づくりの道が拓けるものと考えます。また、こうした場所において親子が気軽に集い、打ち解けた雰囲気の中で語り合うことで、子育て家庭の不安や精神的負担感の解消を図り、様々な問題解決への糸口となる機会を提供できるものと期待しています。

私としては、今回の視察での体験を活かし、今後とも、子どもの視点に立って少子化対策に全力で取り組んでまいりたい所存でございます。

最後に、このような有意義で貴重な機会を提供して下さった法人理事長をはじめとする「NPO法人びーのびーの」のスタッフ、ボランティア、利用者の方々、自治体の関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

(以上)

■関連情報

NPO(特定非営利活動)法人 びーのびーの：<http://www.bi-no.org/top.html>